

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十四卷(第二號)

昭和十四年二月

論 叢

貨幣的利子論の吟味……………

文學博士 高田保馬

中小都市における商店街の構成……………

經濟學博士 谷口吉彦

時 論

最近に於ける通貨收縮性の遲緩……………

經濟學博士 小島昌太郎

事變下に於ける漁村對策……………

經濟學博士 蜷川虎三

研 究

豫想の構造の分析……………

經濟學士 青山秀夫

莫大小業の生産形態……………

經濟學士 堀江英一

カルブンの利子と自然法……………

經濟學士 澤崎堅造

經營分析における比較の意義と形態……………

經濟學士 岡部利良

說 苑

支那の村落……………

經濟學士 宮本又次

財政統計の地方比較……………

經濟學博士 汐見三郎

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

中小都市における商店街の構成

谷 口 吉 彦

目次

- | | | | | | |
|---|------------|---|-----------|---|------------|
| 一 | 商店街の外部形態 | 二 | 商店街の小賣店舗數 | 三 | 商品類別の商店街構成 |
| 四 | 小賣店別の商店街構成 | 五 | 商店街他業者の構成 | 六 | 中小都市商店街の特質 |

一 商店街の外部形態

吾國の大都市における商店街の構成については、さきに本誌において論述した所である。¹⁾ 本論はその續篇として、同じ立場から同じ資料に基づいて、吾國の中小都市における商店街の構成を主題として取扱はんとするものである。

こゝに中小都市といふは、六大都市を除いて、人口三萬人以上を有する都市である。昭和十年十月一日の國勢調査によれば、人口三萬人以上の市は、全國にて百二十四市を計へるが、このうち本調査の對象となつた市は、六大都市を除いて七十八市に過ぎない。いま假りに是等の都市を小都市と中都市とに區分し、更に之を五群に區分して、調査都市および商店街數を示せば次の第一表の如くである。

1) 拙稿『大都市における商店街の構成』(本誌第四十二卷第六號、昭和十一年六月)
2) 昭和十年十二月十日現在 商工省商務局調査

第一表 調査都市および商店街の數

計	市中人口			小都市人口		調査都市名(商店街數)
	(三) 十萬以上 五十萬未満	(四) 十五萬以上 二十萬未満	(五) 二十萬以上 三十萬未満	(二) 五萬以上 十萬未満	(一) 三萬以上 五萬未満	
七八二二七	九	八	八	三七	一六	中津(五)・尾道(二)・高田(一)・栃木(一)・酒田(二)・上田(九)・都城(一)・米子(一)・鶴岡(三)・飯塚(五)・明石(二)・直方(三)・鳥取(三)・弘前(一)・福島(一)・大垣(四)
	三〇	二七	三〇	九六	四四	宇和島(五)・松江(一)・宇治山田(一)・宮(一)・郡山(一)・延岡(四)・高岡(一)・福山(二)・八王子(一)・秋田(二)・清水(一)・大分(三)・長岡(二)・別府(四)・水戸(一)・高崎(三)・宮崎(四)・那覇(七)・津(三)・戸田(四)・盛岡(三)・山形(一)・大津(二)・松本(一)・若松(一)・宇都宮(二)・前橋(五)・旭川(三)・姫路(二)・久留米(一)・徳島(四)・高知(三)・大牟田(一)・小倉(一)・門司(四)・岐阜(六)・下關(五)・濱松(三)・新潟(三)・豊橋(四)
						小樽(四)・金澤(三)・岡山(一)・佐世保(一)・熊本(四)・鹿児島(二)・横須賀(十一)・札幌(一)
						静岡(二)・函館(一)・八幡(一)・長崎(五)・仙臺(九)・吳(二)・福岡(三)・廣島(七)

本論は是等の中小都市七八における二二七の商店街について、主としてその構成を見んとするものであるが、その前提として先づ是等の商店街の外見的形態につき觀察することとする。

第一、商店街の位置、商店街がその都市の如何なる位置を占めるかは、一般的よりは寧ろ特殊的・具體的に意味を有する問題である。一般的には寧ろ購買力の豊富な住宅街に近く位置すべきであると考へられるに過ぎない。

い。たゞ大都市にあつては、住宅街・工場街等々の地域的區劃はほゞ成立してゐるが、中小都市にあつては必ずしも然らず、ことに小都市にあつては、その大部分は謂はゆる商業都市として成立したものであるから、商店街はその都市の中心的存在であり、従つてその都市の中央部に位置するものの多いことは、次の第二表によつても明らかである。

第二表 商店街の位置

合 分 比 計	中 都 市					小 都 市					中心部	東 部	西 部	南 部	北 部	東北部	東南部	西南部	西北部
	(五)群	(四)群	(三)群	(二)群	(一)群	(五)群	(四)群	(三)群	(二)群	(一)群									
六五・六	二 三	一 二	一 六	六 九	二 九														
七・〇	一 一	一 〇	一 一	二 三	三 三														
二・二	一 一	一 一	一 一	二 一	一 一														
五・七	二 一	三 一	四 五	五 三	三 三														
四・〇	一 四	一 四	一 五	一 一	一 一														
四・〇	二 一	二 二	二 三	二 三	三 三														
四・四	一 一	一 三	一 六	一 一	一 一														
四・八	一 一	一 三	一 二	一 六	一 六														
二・二	一 一	一 二	一 三	一 一	一 一														

之によれば全體として六割五分は中心部に位置してゐる。之に次ぐは東部・南部等であるが、その率は極めて低い。而して是等の點では、小都市と中都市との間に、何ら著しい相違を發見することは出来ない。

第二、商店街の大きさ、商店街の實質的の大きさを決定するものは、之を構成する商店の店舗數であるが、これは姑らく後の問題として、こゝでは外見的大さ即ちその延長と幅員を見ることが出来る。さきにも論ぜたる如く、商店街の長さは、こゝに買出しに來る顧客側の要求から、一定程度以上の延長は許されず、また商店街の機能の側

から、一定程度以下の長さも許されず、そこには必ずや何等か標準的の長さの存することも考へられる。餘りに長きに失しては買出しは過勞となり、餘りに短きに失しては買出しの用は足りないからである。次に商店街の幅員も更に重要な問題である。餘りに廣きに失しては、商店街の機能は片側づゝ獨立してしまふから、何れかと言へば、幅員の狭きを有利とすると考へられる。いま中小都市の商店街について、その延長および幅員を見るに第三表の如くである。

第三表 商店街の延長および幅員

全 體	中 都 市					小 都 市					延 長		幅 員		
	(五) 群	(四) 群	(三) 群	(二) 群	(一) 群	(五) 群	(四) 群	(三) 群	(二) 群	(一) 群					
一 三 〇 五	七 一 五	九 〇 〇	五 四 二	一 〇 八 九	一 三 〇 五 _間	四 二	四 二 _間	二 七 二	一 八 三	二 二 三	三 二 四	一 七 〇 _間	四 二 _間	四 二 _間	一 三 〇 五 _間
四 二	七 五	六 八	六 〇	四 二	四 二 _間	四 二	四 二 _間	二 七 二	一 八 三	二 二 三	三 二 四	一 七 〇 _間	四 二 _間	四 二 _間	一 三 〇 五 _間
一 三 三 ・ 四	三 二 四	二 二 三	一 八 三	二 七 二	一 七 〇 _間	四 二	四 二 _間	二 七 二	一 八 三	二 二 三	三 二 四	一 七 〇 _間	四 二 _間	四 二 _間	一 三 〇 五 _間
一 五	一 二	一 五	一 二	一 三	七 _間	一 五	一 二	一 三	一 二	一 五	一 二	七 _間	一 五	一 二	七 _間
一 ・ 一	一 ・ 九	三 ・ 〇	一 ・ 一	一 ・ 五	二 ・ 一 _間	一 ・ 一	一 ・ 五	一 ・ 五	一 ・ 一	三 ・ 〇	一 ・ 九	二 ・ 一 _間	一 ・ 一	一 ・ 五	二 ・ 一 _間
五 ・ 三	五 ・ 三	六 ・ 八	四 ・ 〇	五 ・ 四	三 ・ 八 _間	五 ・ 三	五 ・ 三	四 ・ 〇	五 ・ 四	六 ・ 八	五 ・ 三	三 ・ 八 _間	五 ・ 三	五 ・ 三	三 ・ 八 _間

之によれば極端なる例外としては、最長二十町餘の延長に及ぶもの(高田市商店街)から、最短四十二間に過ぎざるもの(尾道市荒神堂町・徳島市新町橋筋)まで種々雑多ではあるが、平均としては三町乃至四町である。これは商店街として大體に適當の長さであると考へられる。之に反して幅員の平均五・三間、商店街の幅員としては多少廣きに失するかと思はれる。これは恐らく地方の中小都市の商店街には、舊來の地方街道の發展せるものも多く

同時に交通路としての機能をも有するからであらう。

第三、商店街の路面、商店街の路面の状態如何は、その機能を發揮する上に重要な關係を有するものである。路面が舗装されてゐるか否か、人道・車道の區別を有するか否か、電車およびバスの交通あるか否か、車輛通行を禁止してゐるか否かにつき、調査商店街の状態を次の第四表として示しておく。

第四表 商店街の路面

合 分 比 計	小都市					中都市					舗 装	人 道 區 別	電 車	バ ス	車 輛 禁 止
	(一)群	(二)群	(三)群	(四)群	(五)群	(一)群	(二)群	(三)群	(四)群	(五)群					
二〇三	三四	八九	二八	二三	二九	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
一〇六	一〇	七	二	四	一	無	有	有	無	有	無	有	無	有	無
一五〇	三	一三	三	九	六	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
八五〇	四一	八三	二七	一八	二四	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
一一・五	一	九	二	六	八	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
二〇一	四三	八七	二八	二一	二二	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
五九〇	三一	五九	一四	一六	一四	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
四一・〇	一三	三七	一六	一一	一六	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
一九・八	二	一八	一三	四	八	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
八〇・二	四二	七八	一七	二三	二二	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無

之によれば是等の商店街の殆んど九割までは、舗装をなしてゐる。これは言ふまでもなく商店街の機能上より有利である。然るに人道・車道の區別は八割五分まで行はれてゐない。これも商店街としては適當であつて、路面の全部を人道として利用するのが商店街の特徴である。電車・バスの通行は、商店街の機能を害するものであるが、電車のあるは一割餘に過ぎず、バスのあるは六割に達する。自動車その他の車輛の通行を禁止することは

殊に夜間において必要であるが、之を實行するものは寧ろ少く、漸く二割に足らざる状態である。

もと／＼商店街は一定の意識的計畫の下に作られたるものではなく、自然發生的な歴史的産物であるから、以上の如き外面的の諸形態もまた、必ずしも商店街として合目的のもの許りとは言へない。ことに交通の頻繁な地方街道の沿道商店より發達した地方の中小商業都市にあつては、交通路と商店街とを混同するものが多い。近年わが國における商店街の研究の進むに従つて、次第にその特質を明らかにし、従つてその發展の條件を明らかにするに至つたから、右の如き自然發生的な諸形態は、之を政策によつて合理的に改善せねばならぬことは言ふまでもない。

二 商店街の小賣店舗數

こゝに言ふ商店街は、各種小賣店の多數に集合して、全體として一つの小賣機能を發揮する地域である。従つてそこに集合する小賣店舗の絶對數は、全體としての小賣機能によつて規定されねばならぬ。そこから小賣店舗の最小限度が規定されて来る。餘りに少數の専門店舗では、全體として小賣機能を發揮するには足りないからである。併し他方には、その商店街に集中する購買力によつて、小賣店舗數の最大限度が規定される。餘りに多數の店舗では、その經營は成りたゝないのみならず、商店街の長さを徒らに延長して、却つて消費者の購買を不便ならしむるからである。

いま調査したる二百二十七商店街について、その小賣店舗の絶對數を見るに、次の第五表の如くである。

第五表 小賣店舗の絶對數

合 計	小都市					都市數	商店街數	總小賣店數	平均商店街	最 多	最 少
	(一)群	(二)群	(三)群	(四)群	(五)群						
合 計	一六	三七	九	八	八	七八	二二七	一九、四〇二	八五四	四八四	八
中都市											
小都市											
	四四	九六	三〇	二七	三〇						
	三、六一七	八、二四七	二、四四〇	二、一三一	二、九六七						
	八二・二	八五・九	八一・三	七八・九	九五・五						
	四八四	三七九	三〇〇	三七五	二〇八						
	一九	八	二〇	一八	三六						

第五表によれば、小賣店舗の最も多數な商店街は、四百八十四店舗を有し、而かもそれは第一群の小都市即ち人口五萬未満の都市（高田市）にある。恐らく之は嚴密な意味での商店街に屬せざる部分をも包含するものかも知れない。第二群以下の中小都市における最多數を見れば、各々相違を示してはゐるが、大體において最大限度を認めることが出来る。然るに一商店街の最少數は、第二群の八店舗（那覇市銀行通り）の如き例外を除けば、多くは二十店舗内外である。これが恐らく小賣店舗の最小限度と見るべきものであらう。

かくの如く最多と最少との間には著しき相違はあるが、併し一商店街の平均店舗數は、各群都市によりて著しき相違はなく、全體の平均八十五・四店舗にほゞ近い。これが吾國の中小都市における商店街店舗數の典型と見ることが出来る。

中小都市における右の數字を、さきに研究したる吾國の大都市における同じ數字と比較する時は、最多店舗數は五百四十四店舗、最少は五十七店舗、一商店街の平均店舗數は百五十四であつて、何れも遙かに多數である。

殊に平均店舗数においては八十五店舗に對する百五十四店舗を示して二倍に近い。商店街の大規模化傾向すなはち大都市となるに従つて商店街の規模の擴大化する傾向は、從來はたゞ個々の店舗の經營規模の擴大化として考へられたが、全體としての商店街の規模の擴大することも、右の事實によつて明らかである。たゞこの傾向は前掲第五表の中小都市の間には、必ずしも明瞭に現はれず、寧ろ中小都市と大都市との間に現はれてゐる。この店舗数の増加は、都市購買力の増大と小賣店舗の専門化とに根據するものと考へられる。

第二に、商店街小賣店舗の相對数が問題となる。即ち同じ商店街に混在する小賣店舗と他業者との比例數である。之を商店街の密度と言ふことも出来る。如何に密度の高い商店街でも、すべての店舗が小賣店より成るが如きは殆んどない。また全く小賣店舗のみでは、却つて商店街の機能は阻害せられ、或種の他業者の介在する方が却つて有利な場合が多い。けれども餘りに他業者の多い場合はまた、商店街の機能を發揮し得ないこと言ふまでもない。いまこの調査商店街の小賣店舗の比率を示せば次の第六表の如くである。

第六表 小賣店舗の相對數

平均	小都市					中都市				
	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	群	群	群	群	群
最高率	九〇・九%	九三・九	九五・六	八九・七	九二・三					
	四八・六%	四五・六	二七・五	五〇・〇	三五・四					
最低率	七一・〇%	七四・九	六七・九	七四・九	六六・四					
	一、四七九	二、七六八	一、一七九	七一三	一、五〇三					
平均率	三三・六	六二・九	三九・三	二六・四	五〇・一					
	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七					
他業者總數	一、四七九	二、七六八	一、一七九	七一三	一、五〇三					
	三三・六	六二・九	三九・三	二六・四	五〇・一					
一商店街平均	三三・六	六二・九	三九・三	二六・四	五〇・一					
	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七					

第六表について見るに、最も密度の高きは第三群都市の九五・六%（高知市中種）であり、最低密度は同じく二七・九%（岐阜市彌生町通り）を示して、その間に著しき相違がある。併し各群都市の平均率においては著しき相違はなく、全體としては七〇・九%を占めてゐる。即ち吾國の中小都市の商店街では、ほど七割の小賣店舗を包含するのが普通であると言へる。然らばその他業者の絶対數如何を見るに、一商店街平均は全體として三三・七を示してゐる。即ち中小都市商店街の平均では、小賣店舗八五・四と、他業者三三・七より構成されてゐるわけである。此の小賣店舗の密度を大都市のそれと比較するに、最高率も最低率も何れも大都市において高い。平均率もまた同じく、中小都市全體としての七〇・九%に對し、大都市のそれは七六・二%を示してゐる。中小都市において他業者の介在の多かるべきことは、容易に考へらるゝ所である。この他業者が如何なる内容的構成を有するかは商店街の機能の上より重要な問題であるが、之は姑らく後の問題とする。

三 商品種別の商店街構成

商店街の内容的構成のうち、第一に、小賣店とその他の業者との構成については前節に觀察した所であるが、第二に、小賣店の内部構成すなはち各種の小賣店舗をその販賣商品の種類より見たる構成が問題となる。商店街商業または小賣商の構成としては、この外にも尙ほ種々の構成が問題となりうる。例へば小賣商の形態より見て百貨店・小賣店・連鎖店・小賣市場等の別より見たる構成または物品販賣業・金融保險運送倉庫業・飲食店その他の接客業等より見たる廣義の商業構成等々これであるが、こゝでは獨立の専門小賣店より見て商店街を問題とする

ものであるから、かゝる小賣店以外のものは總て他業者として別に取扱ふこととした。従つてその内部構成は販賣商品の種別による外ないが、その商品種類の分類は、前論におけると同じく、消費者の立場より見ての分類を採り、衣料品・食料品・住料品・燃料品・文化品・生産用品・其他の七種類とした。いま調査商店街について、この分類による小賣店の構成を示せば第七表の如くなる。

第七表 商品種類別の構成

	衣料品			食料品			住料品			燃料品			文化品			生産用品			其他			
	店鋪總數	一街平均	對小賣%	店鋪總數	一街平均	對小賣%	店鋪總數	一街平均	對小賣%	店鋪總數	一街平均	對小賣%	店鋪總數	一街平均	對小賣%	店鋪總數	一街平均	對小賣%	店鋪總數	一街平均	對小賣%	
小都市	1190	27.0	32.9	987	22.4	27.3	460	10.4	12.7	23	0.5	0.6	696	15.8	19.2	127	2.8	3.5	134	3.1	3.7	
中都市	(一)群	2701	28.1	32.8	2069	21.6	25.1	1008	10.5	12.2	50	0.5	0.6	1724	18.0	20.9	219	0.3	2.7	476	5.0	5.8
	(二)群	908	30.3	37.2	571	19.0	23.4	234	7.8	9.6	21	0.7	0.9	536	17.9	22.0	62	0.2	2.5	108	3.6	4.4
	(三)群	845	31.3	39.7	374	13.9	17.6	225	8.3	10.6	9	0.3	0.4	533	19.7	25.0	32	1.1	1.5	113	4.2	5.3
	(四)群	845	31.3	39.7	374	13.9	17.6	225	8.3	10.6	9	0.3	0.4	533	19.7	25.0	32	1.1	1.5	113	4.2	5.3
	(五)群	980	32.7	35.0	734	24.5	24.7	362	12.1	12.2	25	9.6	0.1	684	22.8	23.1	64	2.1	2.2	114	3.8	5.8
平均	1325	29.9	35.1	947	20.3	23.6	451	9.8	11.5	264	2.3	0.7	835	18.8	22.0	101	1.3	2.5	189	3.9	4.6	

第七表によつて見るに、七種商品のうち最も多きは衣料品店であつて、一商店街當りの店舗數は、何れの都市においてもほぼ全體の平均三十店舗に近く、小賣店舗數の三五・一%を占めてゐる。之に次ぐは食料品店であつて、一街當り平均は全體として二十店舗、相對的には二三・六%を占める。この二つを以つて商店街小賣店の過半を占める状態である。之に次ぐは文化品店であり、全體の平均店舗數は十八・八、相對數は二二・〇%である。

以上をもつて約八割を占め、残餘の住料品(一一・五%)・生産用品(二・五%)・燃料品(〇・七%)・その他(四・六%)をもつて僅かに二割足らずを占めるに過ぎない。而して是等の構成について中小都市群の間には、何ら著しき相違は認められない。

然るに之を大都市商店街の構成と比較する時は、その間に著しき相違が發見される。衣料品店の最多數といふ點は同じであるが、併しその比率は四三・六%であつたから、中小都市の三五・一%に比較して遙かに高率である。次に大都市における第二位は文化品店の二二・八%であつたが、これは中小都市では第三位となつてゐる。たゞしその比率二二・〇%は著しき相違ではない。食料品店の地位も顛倒し、その比率も大都市では二一・六%を示して中小都市の二三・六%に比し相當に低下してゐる。その他には大都市では住料品八・六%において相當に低率、生産用品(〇・五%)において著しく低率、燃料品において僅かに低率である。

大都市商店街に比較しての中小都市の特徴を要言するならば、中小都市では衣料品において著しく低率であるが、食料品と生産用品と住料品において高率である。之はほぼ中小都市の特質として豫想さるゝ所であるが、併し文化用品の比率に大差ないのは、多少意外とする所である。

四 小賣店別の商店街構成

消費者の側より見たる商品種別による商店街の構成は、前節に觀察する所であるが、更に進んで小賣店の側より見たる構成を問題にする場合には、之を更に細別して、前記の七種商品を三十九類となし、更に之を八十七商

第八表 小賣店別の商店街構成 (1)

種別	類	別	小	賣	店	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	計	百分 比
第一種 衣料品種	第一類 織物類 被服類	1	吳服太物麻織物商	289	521	153	140	183	1,286	19.4		
		2	洋服物、羅紗商	18	64	35	30	39	186	2.8		
		3	洋服商	152	301	116	118	127	814	11.9		
		4	婦人子供服商	25	106	30	20	39	220	3.3		
		5	蒲團、夜具商	24	72	18	19	23	156	2.4		
		6	毛布類商	2	12	7	8	13	42	0.6		
		7	仕立物雜貨	11	—	—	—	—	11	0.2		
		8	古 着	2	—	—	—	—	2	0.03		
	第二類 絲物類	9	綿絲毛絲編物商	68	92	37	44	45	286	4.5		
		10	小間物	105	253	87	84	84	613	9.3		
	第三類 小洋品類	11	帽子商袋物商	19	95	36	45	45	240	3.6		
		12	洋品類商	201	563	198	164	164	1,290	19.5		
	第四類 履物類 雨具類	13	足 袋	5	—	—	—	—	5	0.8		
		14	靴及附屬品商	73	170	53	61	65	427	6.4		
		15	下駄草履履物商	139	319	92	71	108	729	11.0		
		16	傘洋傘其他雨具商	33	82	16	19	22	177	2.7		
	第五類 毛皮、皮 革製品類	17	毛皮商	0	6	1	2	1	10	0.2		
		18	皮革製品商	14	45	29	20	22	130	2.0		
計						1,190	2,701	908	845	980	6,624	100.0
第二種 食料品種	第六類 穀類	19	白米商	46	76	11	24	32	189	4.0		
		20	雜穀穀粉商	11	19	12	1	8	51	1.1		
	第七類 蔬菜類	21	蔬菜商	59	66	26	18	37	206	4.7		
		22	果物商	78	192	42	24	48	384	8.1		
	第八類 魚介類	23	鮮魚介冷凍魚介商	93	89	19	13	39	253	5.3		
		24	其他魚介藻商	36	76	21	7	32	172	5.6		
	第九類 鳥獸肉類	25	牛豚鳥獸商	48	76	34	16	27	201	4.2		
		26	和洋酒清涼飲料商	74	171	45	14	66	370	7.8		
	第十類 調味料類	27	砂糖商	17	36	11	8	24	96	2.0		
		28	味噌醬油調味料商	35	97	17	6	45	200	4.2		
	第十一類 菓子類	29	和洋菓子商	264	656	176	134	213	1,443	30.5		
		30	パン商	22	77	14	18	24	155	3.3		
	第十二類 茶類	31	茶類商	56	106	22	20	31	235	5.0		
		32	豆腐商	3	18	7	1	14	43	0.9		
	第十三類 其 他ノ 食料品類	33	煙草商	52	117	48	41	26	284	6.0		
		34	其他ノ食料商	93	197	66	29	68	453	9.6		
	計						987	2,068	571	374	734	4,735
第三種 住料品種	第十四類 木材類	35	木材商	3	15	3	2	2	30	1.3		
		36	竹材商	1	12	0	0	6	19	0.8		
	第十五類 石材、瓦、 煉瓦セメン ト土砂類	37	石材商	0	4	0	0	0	4	0.2		
		38	瓦煉商	5	9	6	0	2	22	1.0		
	第十六類 建築器具類	39	石灰セメント土砂商	5	6	4	1	2	18	0.8		
		40	建具表具商	13	34	5	0	7	64	2.8		
	第十七類 家具類	41	家具指物商	70	183	54	49	82	438	19.1		
		42	漆器商	25	64	12	18	25	144	6.3		
	第十八類 磁器、陶器、 硝子品類	43	磁器類商	16	50	2	5	13	86	3.8		
		44	荒物商	60	84	21	11	26	202	8.8		
	第十九類 金屬材料類	45	陶磁器土器商	72	152	35	52	54	365	15.9		
		46	板硝子硝子器商	29	52	10	9	17	117	5.1		
第二十類 電氣機械器具類	47	金屬材料商	7	49	5	2	5	68	3.0			
	48	金屬器具商	110	216	57	61	91	535	23.4			
計						34	78	20	15	30	177	7.8
計						460	1,008	254	225	362	2,289	100.0

中小都市における商店街の構成

第四十八卷

三二六

第二號

二八

第八表 小賣店別の商店街構成 (2)

中小都市における商店街の構成

第四十八卷

三二七

第二號

二九

種別	類別	小賣店	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	計	百分比
第四種	第廿一類 薪炭商	薪炭商	7	24	9	6	16	62	47.0
	第廿二類 石炭類	石炭コークス煉炭商	4	3	4	1	5	17	12.9
	第廿三類 油類其他	ガソリン燈油重油商	10	16	4	1	6	37	28.0
		其他ノ燈料燃料商	2	7	4	1	2	16	12.1
第五種	計		23	50	21	9	29	132	100.0
	第廿四類 紙、紙製品類	紙及紙製品商	43	85	27	22	41	218	5.2
	第廿五類 文具類	文具學藝品事務用品	49	183	49	55	57	393	9.4
	第廿六類 玩具類	玩具遊藝娛樂品商	48	116	40	32	47	283	6.8
第六種	第廿七類 藥品類	運動用具商	18	38	10	14	10	88	2.1
	第廿八類 染料品類	藥品衛生材料商	123	288	81	72	109	673	16.1
		染料塗料商	9	17	9	7	6	48	1.1
	第廿九類 化粧品類	香料煙香類商	7	6	5	2	4	24	0.6
第七種	第卅類 時計類	化粧品石鹼商	33	117	26	16	32	224	5.4
	第卅一類 貴金屬類	時計商	90	251	59	68	91	559	13.4
		貴金屬寶石商	10	48	24	9	11	102	2.4
	第卅二類 眼鏡類	眼鏡商	19	70	27	28	34	178	4.3
第八種	第卅三類 樂器類	管樂器絃樂器商	22	49	11	18	12	112	2.7
	第卅四類 著音機及レコード類	著音機及レコード商	29	68	26	40	32	195	4.6
		ラヂオ及附屬品商	25	50	16	20	13	124	3.0
	第卅五類 寫眞機類	寫眞機及寫眞用品商	12	48	18	14	18	110	2.6
第九種	第卅六類 醫療器械類	醫療機械器具商	12	6	7	2	3	30	0.7
	第卅七類 科學器械類	科學的機械器具商	5	8	6	1	6	26	0.6
		度量衡計測器商	25	25	11	5	12	78	1.9
	第卅八類 圖書雜誌類	圖書雜誌商	61	119	44	61	76	361	8.8
第十種	第卅九類 新聞類	新聞鋪	13	14	2	3	5	37	0.9
	第卅十類 美術工藝類	美術工藝書畫骨董商	25	70	24	26	47	192	4.6
		花卉盆栽造花類	18	50	14	18	18	118	2.8
	計		696	1,724	556	533	684	4,173	100.0
第十一種	第卅十一類 肥料類	肥料商	13	9	3	0	1	26	5.2
	第卅十二類 飼料類	飼料商	4	3	2	0	1	10	2.0
		種苗商	12	19	3	1	1	27	5.4
	第卅十三類 農産用機械器具類	農産用機械器具商	10	17	3	1	1	32	6.3
第十二種	第卅十四類 船具類	船具商	0	0	8	0	1	9	1.8
	第卅十五類 漁具類	漁具魚網商	5	7	6	3	3	24	4.8
		自動車部分品商	10	22	7	7	5	51	10.1
	第卅十六類 車輛類	自轉車及部分品商	53	104	14	8	36	215	42.7
第十三種	第卅十七類 鐵砲類	馬車荷運其ノ他車輛	0	15	3	1	1	20	4.0
	第卅十八類 動力機類	鐵砲、火藥商	5	7	1	6	5	24	4.8
		ミシン	1	—	—	—	—	1	0.2
	第卅十九類 動力機類	動力機商	0	4	1	0	0	5	1.0
第十四種	第卅十類 印刷機類	印刷機商	2	—	—	—	—	2	0.4
	第卅十一類 工作機類	工作機械商	0	6	3	1	1	11	2.2
		工具	7	—	—	—	—	7	1.4
	計	機械工具及土工具商	5	15	8	4	8	40	7.9
第十五種	第卅十二類 日用雜貨類		127	219	62	32	64	504	100.0
	第卅十三類 以上ノ分類ニ入ラザルモノ	日用雜貨商ヨロヅ屋	41	111	45	31	43	271	28.7
		以上ニ入ラザルモノ	93	365	63	82	71	674	71.3
	計		134	478	108	113	114	945	100.0
合計			3,617	8,247	2,440	2,137	2,967	19,402	

となして、これが構成の状態を第八表として示すこととした。

第八表について見るに、第一の衣料品種においては、洋品類商が最多を占め、全體の一九・五%を占める。之と大差なきは呉服太物麻織物商であつて、一九・四%を示してゐる。之に次ぐは洋服商(一一・九%)・下駄草履履物商(一一・〇%)であつて、これらの四つをもつて全體の六割以上を占めてゐる。之に對して大都市の構成を見るに¹⁾ 吳服太物麻織物商(一九・二%)・洋品類商(一四・八%)・洋服商(一一・五%)・下駄草履履物商(九・〇%)、これらの合計は約五割五分に相當する。是等の順位および比率において、殆んど著しき相違を發見せず、寧ろ驚くべき程度に相似を示してゐる。

第二に、食料品種については和洋菓子商を最多とし、殆んど集中的に三〇・五%を示してゐる。之に次いで果物商(八・一%)・和洋酒清涼飲料商(七・八%)等が比較的に多い。之を大都市のそれと比較するに、²⁾ 和洋菓子商(三・〇%)を第一位として、果物商(八・一%)・和洋酒清涼飲料商(七・三%)これに次ぎ、こゝでもまたその順位も比率も驚くべき相似を示してゐる。

第三に、文化品種について見るに、之は最も分數的であつて、藥品衛生材料商一六・一%を最高とし、時計商(一三・四%)・文具學藝品事務用品商(九・四)・圖書雜誌商(八・八%)これに次ぐ。然るに大都市においても³⁾ 略々之に近く、藥品衛生材料商(一三・三%)、時計商(一一・九%)、圖書雜誌商(一〇・〇%)、玩具遊戲娛樂品商(八・六%)、文具學藝品事務用品商(八・五%)これに次いでゐる。

第四に、中小都市に比較的多數の住料品種については、金屬器具商(二三・四%)、家具指物商(一九・一%)、陶磁

1) 前掲論文 P. 70
2) 同上 P. 71
3) 同上

器土器商(一五・九%)、荒物商(八・八%)等を主とするが、大都市のそれは家具指物商(二〇・二%)、金屬器具商(二〇・九%)、陶磁器土器商(一四・五%)、荒物商(一二・二%)であつて、こゝでも略々相似の結果を示してゐる。⁴⁾

第五に、同じく中小都市に比較的多い生産用品を見るに、著しく集中的であつて、自轉車及部分品商の四二・七%を第一位とし、自動車部分品商(一〇・一%)、農産用機械器具商(六・三%)これに次ぐ。然るに大都市もまた更に著しく集中的であつて、自轉車及部分品商(五〇・〇%)、機械工具及土工具商(一八・四%)、自動車部分品商(七・六%)であつて、農産用機械器具商の如きは全く存在しない。こゝに多少の相違を示してゐることは言ふまでもない。

要するに大都市と中小都市では、その商品種類別の構成においては、著しき相違を示してゐるに拘らず、各種別の内部的構成においては、一二の例外を除いて、殆んど驚くべき一致を示してゐる。之は商店街小賣店の構成において、寔に興味ある事實と思はれる。

五 商店街他業者の構成

こゝに他業者といふは、小賣店以外の總てのものを指し、その中には百貨店・連鎖店・小賣市場その他の物品販賣業者もあり、是等は他業者といふよりは寧ろ或る意味では同業者である。また銀行・保險・運送・倉庫の如き謂はゆる補助業者もあり、飲食店・理髮店・旅館の如き接客業者もあり、住宅・病院・社寺より空地・空家の如きまで他業者の中に含まれてゐる。

4) 拙稿 前掲論文 P. 70
5) 同上 P. 71.

これら各種の他業者を商店街の見地より見て、二種に分類することが出来る。第一は、商店街の小賣機能を補助する作用を有するもの、例へば適當なる飲食店・小賣市場の如きは是である。第二は、反對に商店街の機能を阻害する作用を有するもの、例へば住宅・病院・空地・空家の如きは是である。商店街に介在する百貨店が、補助的作用を有するか或は阻害的作用を有するかは問題であるが、私見によれば、これまで百貨店のなき商店街に、新たに之を開業する場合には、明らかに阻害的作用をなすが、併し一たん共處に開設されたる以上は、即ちすでに存在する百貨店ことに他の商店街にも百貨店の存在する場合には、却つて補助的作用を有することが多い。また神社・佛閣の如きは普通には阻害的要素と考へられるが、併し市民の信仰あつく参詣者の輻輳する社寺は、有力なる補助的作用をなすものである。商店街の繁榮策として新たに信仰あつき社祠を奉祀するのは、その動機の善悪は姑らく別として、この點を狙つた對策である。

いま調査商店街二百二十七の他業者を分類して、右の點を觀察すれば第八表の如くである。

第九表 商店街他業者の種別構成

計	中都市		小都市		總計	總計	總計	總計
	(五)群	(四)群	(三)群	(二)(一)群				
八八八	一八三	九三	一五七	二四一	二一〇	八八八	二一〇	八八八
一一・六	一二・四	一三・〇	一三・三	八・七	一四・〇	一一・六	一四・〇	一一・六
八四一	一五一	八七	八〇	三〇五	二一八	八四一	二一八	八四一
一一・〇	一〇・〇	一二・二	六・八	一一・〇	一四・八	一一・〇	一四・八	一一・〇
三、一六八	五四四	三〇四	六二八	一、二二五	四六七	三、一六八	四六七	三、一六八
四一・五	三六・二	四二・六	五三・三	四四・三	三一・六	四一・五	三一・六	四一・五
二、七四五	六二一	二二九	三一四	九九七	五八四	二、七四五	五八四	二、七四五
三五・一	四一・三	三二・二	二六・六	三六・〇	三九・六	三五・一	三九・六	三五・一

第八表によれば他業者のうち最多は何れの都市においても接客業者であり、全體として四一・五%を占める。之に次ぐは其他に屬する住宅・病院・社寺等であり、全體として三五・一%を占める。次いでは物品販賣業者および補助業者であつて、何れも約一一%を占めてゐる。今これを前述の補助的要素と阻害的要素とに分ちて見るに極めて大まかに見て、物品販賣業者と接客業者とを假りに補助的となし、補助業者と其他とを假りに阻害的と見ることが出来る。補助業者を阻害的要素と見ることは、穩當を缺く様にも思はれるが、併し之に屬する銀行保險・運送・倉庫の如きは、必ずしも小賣店の補助業とは言へず、また必ずしも商店街に介在することを要せず、反對に是等の大建築物の介在は、全體としての商店街の小賣機能を阻害することゝなるからである。そこで假りに右の分類に従へば、補助的要素は五三・一%となり、他業者の過半を占めてゐる。

他業者に關する以上の觀察を大都市のそれに比較するに、¹⁾接客業者六二・一%、其他二四・五%、物品販賣業者八・三%、補助業者五・九%を示し、中小都市に比しその順位は全く同じであるが、併しその比率は著しく相違してゐる。即ち接客業者は著しく多く、住宅その他のものも物品販賣業者も補助業者も著しく少い。之を假りに前述の二種類に分つならば、補助的要素は七〇・四%となり、中小都市の五三・一%に比し著しく高率である。

次に商店街他業者を更に細別して十六類三十四業別となし、各種他業者の内譯を示せば第十表の如くなる。

第十表によりて見れば、最も多數の接客業者の中にて多數を占めるものは、理髮店(一六・五%)、和食店(一三・四%)、うどんや(一二・二%)、旅館(一〇・〇%)等である。之を大都市の場合と比較するに、²⁾和食店(二七・四%)、喫茶店(一六・九%)、理髮店(一〇・五%)、うどんや(一〇・二%)となり、この相違は大都市の特徴を現はしてゐる。

1) 拙稿 前掲論文 P. 74.
2) 同上 P. 74.

中小都市における商店街の構成

第四十八卷

物品販賣業者のうち重要な地位を占めるものは、卸賣業(八〇・二%)、中規模百貨店(四・四%)、小規模百貨店(三・三%)であり、大都市にあつては卸賣業(四九・二%)、小賣市場(二三・一%)、連鎖店(八・一%)、小規模百貨店(七・六%)、大規模百貨店(七・一%)等であるから、こゝにも大都市的な特徴を示してゐる。

次に補助業者のうち主要のものは、銀行(三〇・九%)、運送(二八・二%)、保険(二五・三%)であり、之を大都市と比較すれば、銀行(五八・六%)、その他の金融業者(二二・一%)、保険(九・三%)、運送(七・九%)である。

最後に、住宅その他の他業者のうちでは、空家(三〇・〇%)、住宅(二一・五%)、醫院(一〇・二%)、事務所(一〇・二%)を主要のものと³⁾するが、大都市にあつても、空家(二一・四%)、住宅(二〇・二%)、事務所(一二・五%)、醫院(一・九%)であつて、その間には著しき相違を認め難い。

要するに中小都市の商店街では、全體として約三割の他業者を包含してゐるが、このうち約四割の接客業者、三割五分の住宅・空家等を含み、大都市に比しては、全體としての他業者は稍々多く、その中では接客業者の比率は著しく少く、その他の他業者は比較的に高率である。

六 中小都市商店街の特質

人口三萬人以上を有する吾國の中小都市七十八に含まるゝ商店街二百二十七について、特にその小賣店を中心に觀察した結果は以上の如くである。個々の點については、その都度これを大都市のそれと比較しつゝ、兩者の特異性と一般性とを明らかにせんと努めて來たが、最後に結論として、特に重要と思はるゝ諸點を指摘して、中

小都市商店街の特異性を明らかにしたいと思ふ。

固より此の調査は決して完全なものではない。尙およそ五十の同じ都市が此の調査から脱洩してゐるのみならず、或は嚴密には商店街と認むべからざるもの、または認むべからざる部分をも含むかも知れず、或は商店街と認むべきものにして脱洩してゐるものも無いとは言へない。ことに之は昭和十年十二月十日現在の調査であるから、今日から見れば、その後の變化ことに日支事變による影響の如きを知ることが出来ない。かくの如く極めて限定的な調査資料ではあるが、併し吾々は尙ほ之によつて、種々の興味ある事實を知ることが出来た。特に吾々の興味を惹く點は、さきにも指摘したるが如く、種々の例外的事例をも包含してゐるに拘らず、尙そこには中小都市商店街に共通する多くの一般的なるものを發見しうる點にある。人或は疑つて斯くの如く全國的な種々雑多の商店街を呼せ集めて、之を統計的に調査したりとて、何ごとをか學びうると言ふものあらば、何よりもまづ空論を休めて、仔細に本論の結果を吟味せよ。そこには恐らく論者の全く知り得なかつた多くの一般性と特殊性とを發見しうるであらう。

等しく中小都市と言ふも、その中には人口三萬人の小都市から、三十萬人を超ゆる中都市まで、大小種々の都市を包含し、従つてその商店街もまた都市の大小によりて、それらの特異性を有するであらうとは、普通に考へられる所である。また實際に商店街を檢分しても、その外見も内容も著しく相違はしてゐる。この見地から吾々は前述の如く中小都市を五階段に區分して、それらの特殊性を發見せんと努めたのであるが、併し吾々の問題とした諸點ことに商店街の構成に關する諸問題については、殆んどそれらの間に著しき特異性を發見すること

は出来ない。即ち中小都市の商店街は、都市の大小に拘らず、大體において極めて多くの共通性を有し、従つて之をその一般性において把握することが出来る。たゞ人口二十萬乃至三十萬程度の中都市にあつては、その中心商店街のみを採れば、恐らく多くの特異性を發見すべく、寧ろ大都市商店街に類似の特徴を有するかも知れない。併しながらその都市全體としての多くの商店街を採れば、この特徴は失はれて、寧ろ小都市商店街と共通の特質を現はして来るわけである。

中小都市そのものの特質を、商店街の見地より、大都市と對照せしめて考ふることも無駄ではない。固より各都市はそれ／＼にその特殊性を有することも否定できないが、中小都市が大都市に對比して一般的なる特徴を有することも疑ない。而して中小都市商店街の一般的なる特異性は、若しそれが有りとせば、根本的にはかゝる中小都市そのものの特質から来るものと考へねばならぬ。吾々はたゞ中小都市商店街の一般性または特殊性を指摘するに止まらず、更に進んで之をその都市そのものから説明または理解すべく努めねばならない。

第一に、商店街の外見的形態において注意すべき點を列舉すれば、その六割五分までは都市の中央部に位置し平均的に三町ないし四町の延長と四間ないし五間の幅員を有し、その九割までは路面舗装を有し、八割五分までは人道・車道の區別なく、九割近くは電車を通ぜず、六割近くはバスを通じ、八割までは車輛通行を禁止してゐない。是等は一々説明するまでもなく、中小都市そのものの特質より来る點の多いことは言ふまでもない。

第二に、商店街における小賣店の絶對數は、多きものは三百店ないし四百店より成り、少きものは二十店內外より成つて、その間に著しき相違はあるが、併し一商店街平均の店舗數には大差なく、大體は八十五店内外より成つてゐる。之に對して小賣店以外の介在數は、平均的に三十五内外であり、兩者を合して約百二十をもつて商店街を構成してゐる。大都市においても、小賣店の最多數には大差はないが、最少數は著しく多數となり、平均

數は中小都市の二倍近くの百五十四店を示してゐる。大都市の他業者は平均五十より成り、兩者を合して約二百をもつて構成されてゐる。こゝにも都市そのものゝ特徴が現はれてゐる。

第三に、小賣店の相對數すなはち商店街小賣店の密度は、約七割を普通とする。従つて約三割の他業者を包含してゐるわけである。然るに大都市においては、約七割六分の小賣店密度を示し稍々高率である。

第四に、商店街小賣店の商品別構成を見るに、約三割五分の衣料品、二割四分の食料品、二割二分の文化品より成り、三者にて全體の約八割を占めてゐる。外に三%近くの生産用品、一%に足りない燃料品その他を有する。然るに大都市にあつては、その順位を異にして衣料品・文化品・食料品となり、且つ衣料品は四割三分の高率を示してゐる。即ち中小都市の特徴は、衣料品に少く食料品に多く、文化品の順位は落ちるが、その比率には大差ない。また生産用品の中小都市に多きことも當然である。

第五に、最も興味ふかき事實は、各種商品を取扱ふ小賣店の構成が、中小都市に於ても殆んど大都市におけると相違なき點にある。例へば食料品種に屬する小賣店は、中小都市では和洋菓子三〇・五%、果物八・一%、和洋酒七・八%を順位とするが、大都市においてもまた和洋菓子三三・〇%、果物八・一%、和洋酒七・三%となつて、その順位も比率も殆んど一致してゐる。

第六に、商店街の他業者の構成では、中小都市における補助的要素五割五分に對し、大都市においては約七割を占めてゐるから、商店街における阻害的要素は、當然にも中小都市において遙かに大である。而してその内部構成は小賣店の場合と異り、多分に中小都市の特徴を示してゐる。

本論においては、たゞあるがまゝの事實を事實として觀察したに過ぎない。之に對して施すべき政策ことに商店街更生策については、別の機會にゆづることとする。